

働く

自慢じゃないけれど、僕は眼鏡を二つも持っている。遠近両用と近近両用である。遠近両用は普段にかける。近近両用は仕事にかける。これをかければ、三十センチ離れた本と、五十センチ離れたパソコンの画面がどちらもはっきりと見える。将来、遠近近用眼鏡が開発されたら、どんなに便利になることだろう。要するに歳をとったのだ。職業柄、目を酷使しがちだから無理もないことだが、加齢の影響

驚くかもしれないが、僕は携帯電話を持っていない。自由気ままに行動したいのに、誰かに居場所を知らせるとか、誰から突然連絡がはいるなんて、もつてのほかである。だいいち、誰があんな小さな数字を識別し、親指で押せるものか。メールの小さな文字を見るために、わざわざ眼鏡を外さなければならぬじゃないか。

歳をとるのも悪くない^上

東京大学社会科学研究所教授 中村圭介



になったせいもあり、最近、妻と週末にプチ・ハイキングにでかけることが多くなった。先日は秩父の芦ヶ久保にカタクリの花を見に出かけた。もっとも、人混みの嫌いな僕は「カタクリ祭り」の一週間後に行ったため、わずかにその痕跡を眺められただけだったのだが、でも、淡い緑と淡いピンクに彩られた山々を眺めながら、さ

仕事と生活の両立

響が一挙にそこにきたのである。いま五十一歳。不便にはなっていたけれど、最近、ひよんなきつかけで、仕事と生活の両立という言葉の意味を実感するようになった。そして、歳をとるのも悪くないじゃないかと思うようになった。きまぎれでもない。

わやかな木や草のかおりの中を歩くことができ、実に楽しかった。二人でプチ・ハイキングを楽しむ、充実した気分を味わうようになるなどは、三十代、四十代ではあまり考えられなかった。仕事や子育てで忙しかったからだ。

とは、仕事をいい加減にやるようになるとか、手抜きをするようになるとかというのではない。自分の例で恐縮だが、僕は三十代の頃、同時に十個以上の調査研究プロジェクトにかかわっていた。僕は労働問題の研究者だから、労働や仕事に関することだったら何でも、とはいわないまでもさまざまな調査研究を行っていた。いま

かってくる。だから、あまり無理をしないで仕事ができるようになる。もっとも、部長、取締役、さらにはその上をねらって、依然として懸命に努力している人は別である。だが、多くの普通の人はいたいこんなものかとわかってくるのではないかと僕は思う。

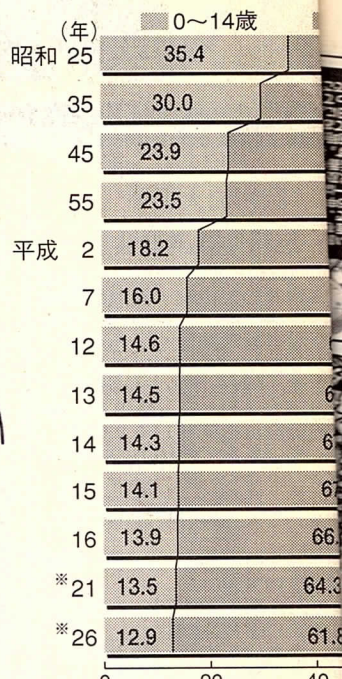
若い頃は、ある意味では修業時代だから、とにかく仕事をこなす方がいいのかもしれない。自分にはどんな仕事に向き、どのような才能があるのかもよくわからないから、とにかくチャレンジする必

要があるかもしれない。その過程で成長していく。そんな時に、仕事と生活の両立と言われても、もちろん、その大切さを頭では承知していたとしても、心の余裕はなかっただろうし、それがどんなことなのか、何をすれば両立したことになるのか、それがどのような良いものなのかはよくわからなかったように思う。

いまは違う。得意分野ができた。自ら定めた仕事時間内で、精いっぱい努力してできる範囲の仕事しかしない、実際にはそうなるように心がける(一年前に本紙に三回にわたって連載した「仕事と時間と成果主義」を参照してほしい)。夕方には帰宅して料理を手伝う。週末には二人でプチ・ハイキング。あーこれが仕事と生活の両立というやつだ、なかなか良いものだわかってきた。こんな風に考えているのは僕だけでしょか？

進む

人口の割合の推



※平成21年、26年は、国立社会保障

く、東京都が12・0%で

最



- ・15・8、ロシア16
- ・8、ポーランド18・
- 2、カナダ18・3、英国
- 18・6、フランス18・
- 9、韓国20・6、米国21
- ・0、中国22・4、アル
- ゼンチン28・3、南アフ
- リカ32・1、インド34・
- 4、タンザニア44・2・

などとなっている。

一方、川岸のあちこちに建てられた仮小屋では、くまに、芝居・見世物などの江戸中のミニライブ

次回は

次
回

労働調査協議会調査

労働調査協議会は、連 若者（三十四歳以下）約合などの労働組合を中心 五千人を対象に実施されに四十四の組織が設立した。多くは、大卒で、就職したシンクタンクで、一九 活動を経て、本人が希望四八年から、労働問題に した企業に就職しているついでに調査・研究を続 のが、特徴である。

今回の調査は、首都圏 調査によると、平均的の大企業で働く会社員の な仕事開始の時間は、午

高校時代の友人が「早期退職で会社を辞めました」という年賀状をくれたのは去年の正月だった。友達は事業を始めるわけでも、家業を継ぐわけでも、関連会社に行くわけでもなかった。引退したのである。賀状をもらった僕は羨望と不安と違和感の入りまじった複雑な気持ちにおそわれた。

友達の勤め先は外資系の石油会社で、早期退職で退職金が割り増しされるから十分すぎるほどの企業年金が支給されるのだろう。また、スキー、テニス、スイミング、囲碁、将棋など多彩な趣味をもっているから、することがなくて困るという事もないのだ。僕は違う。今の勤め先に入ったのは四十歳を過ぎてからであり、退職金も少ない。趣味といえるものは料理、そして徘徊、いや違ったプチ・ハイキングくらいで、た

歳をとるのも悪くない

東京大学社会科学研究所教授 中村圭介



「今の仕事 病気に…」

職場では、上司や同僚 成果が上がる」と考えて、約四割に「今の働き方が続くと病気になる」と、五割超が「今のままだと生活習慣病になる」としている。

勤務時間が長いことについては、「好きな仕事

まにするのは楽しいけれど、毎日では飽きてしまう。いや家族から嫌がられるかもしれない。だから引退できない。友達の賀状をみて、こんな風に、引退できない理由をいくつかあげてみたものの、何か、しっくりこなかった。

本当の事を言えば、まだまだ仕事をしたかったのである。引退できないのではなく、したくないのだ。

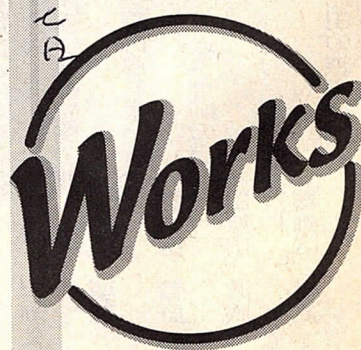
中高年の誇り、大切に

ノーベル賞をとるなどというたいそれた考えなど毛頭ないし、今さら、大きな理論的貢献ができるとも思っていない。けれども、まだ労働問題、社会問題に取り組み、その解決の小さな糸口を発見するような事は十分、できる。実証研究に必要な知力、体力はまだ衰えてはいない。中年になったとはいえ、まだ十分に働けると考えて

ツクされ、人事考課に反映され、昇給額や賞与にひびく。だから中高年も懸命に働く。人事管理論の教科書に出てくるような説明だがこれも一つの理由であろう。だが、人事考課は怠ける事を防ぐとしても、懸命に頑張る事を促す機能はそれほどないと思つた。

上司や同僚も自分がどこまでできるかはわかってはいるはずだ。彼らの期待を裏切る事などできない。みつともないではないか。何よりも、自分自身に対して情けない。こうした誇りがあるからこそ、手抜きなどはもつてのほかなのである。僕はそう思う。

仕事に固有な勘所を身に付け、自らの仕事ぶりに誇りをもつていい。本人が実力の限界、気力の衰えを感じ、納得した上で、そうした措置がとられるならばよい。もしそうでなかったら、身に付けた勘所は生かせなくなり、自分に対する誇りは傷つけられる。それは企業にとっても、本当に良い事なのだろうか。歳をとるのも悪くないと考え、仕事と生活を両立させている中高年をもっと大切にすべきだと僕は考えているのです。



一方、親との関係では、親と一緒に親の近くに住んで、親と生活圏を共有しているケースが、多かった。親と同居、近居を合わせると、二十歳代前半では48%、二十歳代後半では36%、三十歳代前半では46%を占めた。

二組が、七月に江戸を番士でも家来が七人いるので大移動だ。武士から自己管理をしていく。真夏の行進はキツイ。さて、現代より、江戸では生活習慣も違った。江戸の庶民は、朝、夕は冷や飯だが、昼に炊き、朝・夕が冷や

次回は

中高年は、その高い生産性と勤勉さにふさわしい処遇を与えられているのだろうか。最近、中堅企業、大企業では五十歳をすぎると関連企業に出向、転籍されることが多くなった。部長、課長などでは以前より役職定年制があり、五十代半ばで役職をおりる。平社員で会社に残るか、出向、転籍かの選択になる。人事の停滞を防ぎ、若返りするためだそうである。

ワ 入 改 跡」 オ 上 悪 の 代 化 関 律」 策 定 リン 化 台 成 工